

枕草子 第一回

その一 春はあけぼの

春はあけぼの、少しづつ、白みをまして明けていく、その夜明けの風情の素敵さ。山の稜線も、ほんの少し明るくなつて、紫色を帯びた雲が、細くたなびく。

夏は夜。もちろん月が光っていればなおのこと。たとえ月がなくて、暗い闇夜であっても、ホタルがたくさん飛び交うようすは格別。そうではなくて、ホタルがひとつふたつと、ほんのりと光をたたえて飛んでいたりするものも、とつてもきれい。雨が降っても、それはそれでわるくない。

秋は夕暮れ。山に夕陽が落ちていき、なんだか山が、とても近くに感じられるなかを、カラスが寢床へ行こうとして、三羽、四羽、あるいは二羽、三羽と、急いで飛んでいく、そんなようすにも心をひかれ、ましてや夕暮れの空の高みを、雁が連なって渡っていくのが小さく見えたりするのは、ほんとうに素敵。陽がすっかり暮れて、ふと、風の音や虫の音が聞こえてきたりなどすれば、もう、言葉に表せないほど、うれしく愛おしい。

冬は朝の早くがいい。空から雪が降ってくるようすの素晴らしさはもちろんだけれど、地面に霜が白く光っているのもよくて、また、ひととき寒い朝に、いそいで火をおこしたりなどして、いそいそと炭を部屋へと運ぶのも、いかにも冬らしくて、とつてもいい。昼になって、寒さも和らいでくる頃になると、そんな部屋の炭も、いつのまにか白い灰になってしまつて、ちつとも面白くない。